

声 のコーナー

『振り返って見ると 牛がいて』



肉用牛経営：荒川町大字長政 三田 厚子氏

私は農家出身ですし、姉も農家へ嫁いでいます。姉は秋田県大潟村の日本一の大型稲作地帯で農業をやっています。そんな稲作中心の農家ばかり見て来た私は農業をもまさか自分が牛飼いの母ちゃんになるとは夢にも思いませんでした。最初の頃はなかなか馴染めず、気持ちが減入る事もよくありました。私が嫁いだ最初の頃は、昔から飼っていた牛2頭、母豚が10頭、田んぼを250a作っていました。どちらかと言えば、豚と田んぼに力を入れていましたが、それがだんだんと豚より牛の方が多くなり、宅地内では将来飼ってられないという事で、田んぼを埋め立て平成2年に100頭規模の牛舎を建て、7年には堆肥舎、8年には50頭くらい入る牛舎を建てました。堆肥は最初の頃、使いきれなく山積になっていた事もありましたが、今は主に、生産組合の人達と連携して使ってもらっています。

牛舎を建ててから、いろいろな事がありました。今一番思い出されるのは台風の直撃を受け、2~3度屋根の一部が飛ばされたことや、一番うれしかったのは、平成8年に全国枝肉共励会に出品した牛が、名誉賞をもらった時の事です。最初は信じられませんが、それが日がたつにつれて新聞の取材やテレビ出演の話がくるようになり、すごい事なんだなあ、と実感しました。そんな夢みたいなき事があったのに、5年後の今はBSEだなんて信じられません。枝肉価格はまだ低迷し良くありません。皆様に、とにかく牛肉をたくさん食べて欲しいと思っています。私たちにはヘルパーは有りません。でも1年に一度くらいは、同じ肉牛を飼っている人に頼んで旅行に出かける事もあります。「休みなしで大変だね。」と人に言われる時もありますが、「夫と二人でやっているから」……と言える様になりました。

私は牛の事は今でも何もわかりませんが、これからも頑張っていこうと思っています。

『都会の風』



酪農経営：柿崎町大字猿毛 武藤 正信氏

我家に東京農工大農学部の学生が研修に入ってから、10年が過ぎました。この大学の先生で、知り合いだった塩谷先生から、平成3年の12月に、雪国体験をしたいという学生がいるので、預かってくれないうか、という要望がきました。家族に伝えますとまず50代後半だった母が東京の若者というだけで拒否反応、テレビなどで伝わってくる悪印象が先行したものです。何とか説得して、翌年1月の小正月を中心に来てもらうことにしました。

この年は雪が少なく、学生が来たときは、雪は軒下にあるだけで雪国体験とは名ばかりになってしまうかもしれないが、田舎暮らしを満喫してもらうべく努力することにしました。朝晩の搾乳の手伝い、ストーブ用の薪割り、小正月の臼ときねでの餅つきなど、ここでしか味わえない体験を工夫しました。

最後は寒の神です。長年歴史のある行事、集落民全員により大小二つのわらぶきの家を半日で作り上げ夕刻よりこの年の年男年女が火をつけます。そしてその火で餅やいかを焼き、それを食べることによってこの年の無病息災を祈ります。訪れた二人は誰が見ても満喫した様に写りました。その後、二人がそれぞれ仲間を連れて、3月に再度訪れ、それ以降入れ替わりに立ち代わりに仲間を呼び、いつのまにか他の大学、又女子学生も加わり、1年中、学生が絶えないほどでした。雪国体験に来た一人である今井君が「農業をやりたい」と我家に研修に入ったのは、2年後の春でした。古屋を借りた彼の家、また我家と、なおいっそう学生の往来が頻繁になりました。私のアドレス帳には100人を超える学生の名前があります。この内の半分は現在でも何らかの形で交流が続いています。今考えると、訪れた学生たちと酒を酌み交わしながら語り合ったあの時は、田舎暮らしの良さであるとか、農業の大切さ、農業の持っている機能など、私の方から学生に一方的に伝えていたばかり、と書いていたのですが、学生たちが運んでくる都会の風も私は楽しんでいったような気がします。今井君は現在、我が集落で家を新築し、お嫁さんもらい、子供が一人できて、本当に幸せな農家暮らしをしています。学生が運んでくれる都会の風は、この山あいの小さな集落に活気をもたらしてくれました。